千葉市感染症発生動向調査情報

2025年 第38週 (9/15-9/21)

1 定点把握対象感染症(五類感染症の一部)

定点	報告定点医療機関数			
	第38週	第37週	第36週	第35週
小児科	16	16	16	16
ARI(急性呼吸器感染症)	26	26	26	26
眼科	4	5	5	5
基幹	1	1	1	1

上段:報告患者数、下段:定点当たりの報告数

定点当たりの報告数:報告患者数/報告定点医療機関数

定点	感染症	発生動向	9/15-9/21 第38週	9/8-9/14 第37週	9/1-9/7 第36週	8/25-8/31 第35週
小児科	RSウイルス感染症		8 0.50	6 0.38	13 0.81	13 0.81
	咽頭結膜熱		1 0.06	3 0.19	2 0.13	1 0.06
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎		26 1.63	25 1.56	31 1.94	23 1.44
	感染性胃腸炎	↓	59 3.69	82 5.13	77 4.81	72 4.50
	水痘		2 0.13	0 0.00	3 0.19	1 0.06
	手足口病	↓	21 1.31	53 3.31	35 2.19	29 1.81
	伝染性紅斑	↑	16 1.00	15 0.94	15 0.94	25 1.56
	突発性発しん		3 0.19	6 0.38	7 0.44	7 0.44
	ヘルパンギーナ	↓	11 0.69	22 1.38	17 1.06	21 1.31
	流行性耳下腺炎		1 0.06	1 0.06	1 0.06	0 0.00
ARI	インフルエンザ (高病原性鳥インフルエンザを除く)		16 0.62	12 0.46	13 0.50	4 0.15
	新型コロナウイルス感染症	↓	98 3.77	133 5.12	125 4.81	142 5.46
	急性呼吸器感染症	↓	1,168 44.92	1,439 55.35	1,070 41.15	1,088 41.85
眼科	急性出血性結膜炎		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	流行性角結膜炎	↓	4 1.00	10 2.00	16 3.20	10 2.00
基幹	クラミジア肺炎 (オウム病を除く)		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	細菌性髄膜炎 (髄膜炎菌性髄膜炎を除く)		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	マイコプラズマ肺炎		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	無菌性髄膜炎	↑	1 1.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	感染性胃腸炎 (ロタウイルスに限る)		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	インフルエンザ入院		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	新型コロナウイルス感染症入院		4 4.00	4 4.00	3 3.00	4 4.00

※「発生動向」欄のマークについて

＜流行状況＞

★★:「警報レベル」流行発生警報開始基準値以上(終息基準値を下回るまで継続表示)

★ :「注意報レベル」流行発生注意報基準値以上

※警報レベル・注意報レベルについては、市感染症情報センターWebSiteの「警報・注意報の解説」のページをご覧ください。

＜増減＞:マークの対象は当該週又は前週の定点当たりの報告数が1.00以上

↑・↓:「増加・減少」定点当たりの報告数が前週より5%を超えた増加または減少

2　全数報告対象感染症　　25　件

感染症		性別	年齢層	感染症	性別	年齢層
結核	患者	男	30歳代	梅毒	男	50歳代
	無症状病原体保有者	女	40歳代	百日咳：16件	男女	10歳未満　2
	患者	男	50歳代		男女	10歳代　9
	無症状病原体保有者	女	60歳代		男	30歳代　1
	患者	女	80歳代		女	40歳代　1
レジオネラ症		男	60歳代		男女	50歳代　2
		女	70歳代		男	60歳代　1
アメーバ赤痢		男	50歳代	－	－	－

結核5件（114）、レジオネラ症2件（4）、アメーバ赤痢1件（2）、梅毒1件（49）、百日咳16件（855）の発生届があった。

※　（）内は2025年の累積件数。但し、累積件数は速報値であり、データが随時訂正されるため変化します。

3　定点当たり報告数　第38週のコメント

＜A群溶血性レンサ球菌咽頭炎＞

前週からほぼ変化なく1.63となったが、過去5年の同時期と比べ最多となった。年齢階級別の報告数は6歳が最多。

＜感染性胃腸炎＞

前週より減少し3.69となった。年齢階級別の報告数は1歳が最多。

＜手足口病＞

前週より減少し1.31となった。年齢階級別の報告数は1歳及び2歳が最多。

＜伝染性紅斑＞

前週より増加し1.00となった。年齢階級別の報告数は4歳が最多。

＜ヘルパンギーナ＞

前週より減少し0.69となった。

＜新型コロナウイルス感染症＞

前週より減少し3.77となった。年代別の報告数は10-19歳が最多。

＜急性呼吸器感染症＞（第15週から調査開始）

前週より減少し44.92となった。年齢群別の報告数は1-4歳が最多。

＜流行性角結膜炎＞

前週より減少し1.00となったが、過去5年の同時期と比べ最多のまま。年代別の報告数は30-39歳が最多。

＜無菌性髄膜炎＞

前週より増加し1.00となった。

＜新型コロナウイルス感染症（入院）＞

前週から変化なく4.00だった。

■　各感染症のグラフ、インフルエンザ発生状況は、市感染症情報センターWebSiteでご覧いただけます。
・感染症発生グラフ
https://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/iryoeisei/khoken/kkagaku/idsc/documents/graph2025.pdf
・インフルエンザ発生状況
https://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/iryoeisei/khoken/kkagaku/idsc/documents/influ2025.pdf

■　トピック　■

＜結核＞

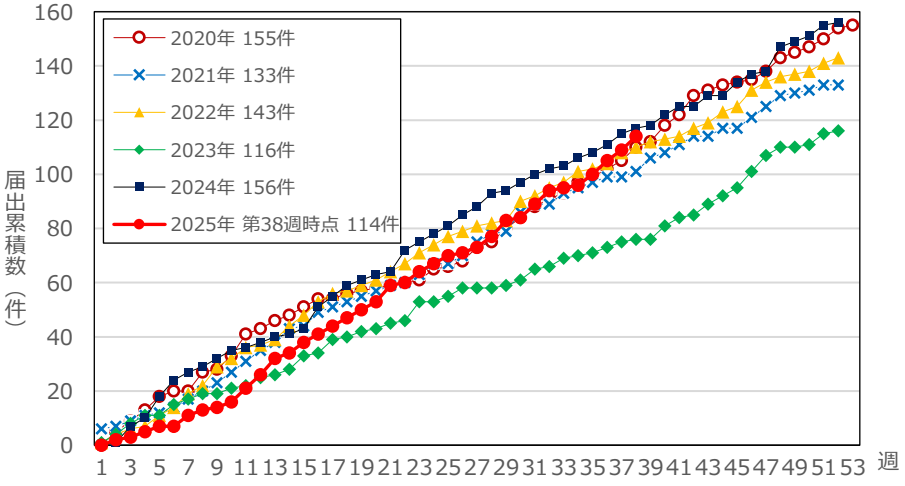
厚生労働省では、毎年9月24日から30日までを「結核・呼吸器感染症予防週間」として、地方自治体や関係団体の協力を得て結核・呼吸器感染症予防に関する普及啓発を行っています。マスク着用を含む咳エチケット、手洗い、換気等の基本的感染対策や予防接種の重要性等、呼吸器感染症に関する知識の普及啓発を図ることとしています。

結核は、今でも年間10,000人以上の新しい患者が発生し、1,400人以上が命を落としている日本の主要な感染症です。

2025年第37週時点の全国の届出累積数は10,014件で、過去5年の同時期と比べると2023年（9,937件）に次いで少なくなっています。都道府県別では、東京都（1,340件）が最も多く、次いで大阪府（705件）、愛知県（617件）、神奈川県（616件）、千葉県（597件）の順となっています。

千葉市では第38週に5件の発生届があり、2025年の届出累積数は114件となりました。過去5年の同時期（2020年110件、2021年101件、2022年110件、2023年76件、2024年117件）と比べると、2024年に次いで多くなっています。2020年（155件）から2023年（116件）まで届出数は減少傾向となっていましたが、2024年は前年より40件増加し156件となりました（図1）。

図1　年別届出累積数（2020年第1週-2025年第38週）



結核は、主に肺の内部で増えますが、肺以外の臓器が冒される場合もあります。しかし、ヒトからヒトへの感染が問題になるのは肺結核のため、肺に病変が認められる症例を「肺結核」として整理しています。

各年の届出に占める肺結核患者の割合は、2020年（55.5%）以降減少し、2022年（42.7%）に半数未満となり2024年（39.1%）まで同程度となっていましたが、2025年（53.5%）は半数以上となり、2020年と同レベル程度まで増加しています（図2）。2020年第1週から2025年第38週まで、男性482件（59.0%）、女性335件（41.0%）の817件の届出がありました。年代別では80-89歳（147件、18.0%）が最も多く、次いで70-79歳（144件、17.6%）、50-59歳（131件、16.0%）の順となっています。男性では50歳代から80歳代までが各80件以上で他の年代と比べて多く、女性では80歳代を除く20歳代以上は30件から40件前後とほぼ同レベルで、80歳代が60件を超え他の年代と比べて多くなっています（図3）。

図2　年別・各病型が占める割合
（2020年第1週-2025年第38週 n=817）　※グラフ内数字は届出数

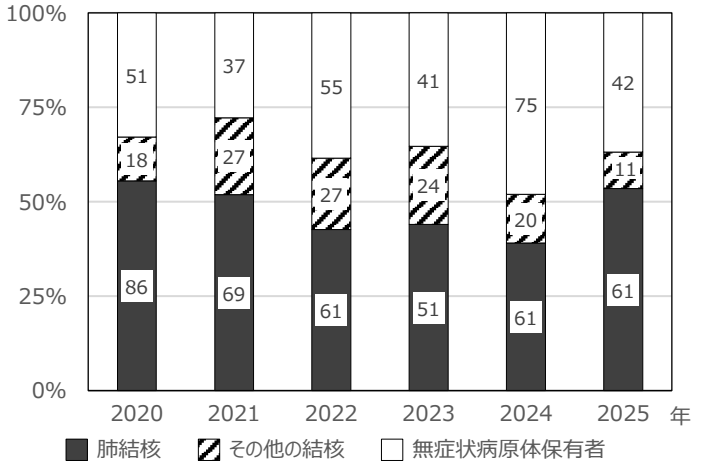
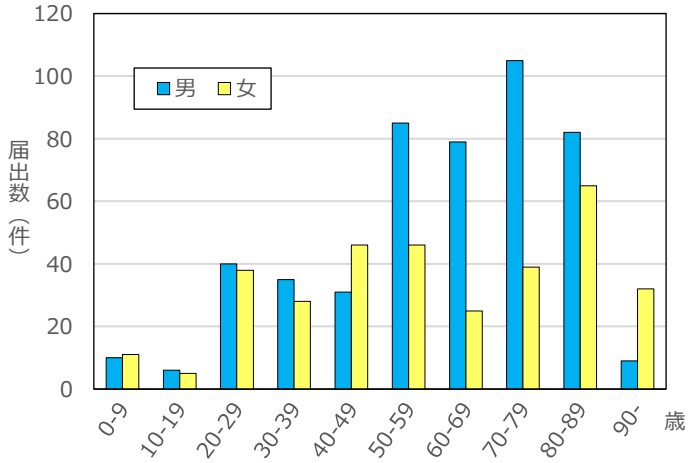


図3　性別・年代別
（2020年第1週-2025年第38週 n=817）



各年代における年別の動向は男女差が見られ、2024年において男性では20歳代及び30歳代が過去最多となった一方で、女性では10歳代、20歳代、30歳代、50歳代及び80歳代と幅広い年代で過去最多となりました。また、2025年第38週時点における男女別の届出数（114件：男性69件、女性45件）に対する年代の分布は、男性では50歳代（18件、26.5%）が、女性では80歳代（9件、20.0%）が最多となっています（図4、図5）。

図4　年代別・年別届出数
（男：2020年第1週-2025年第38週 n=482）

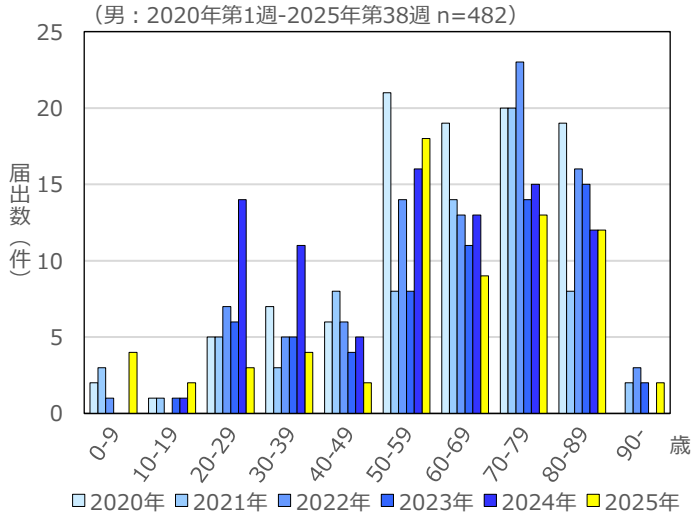
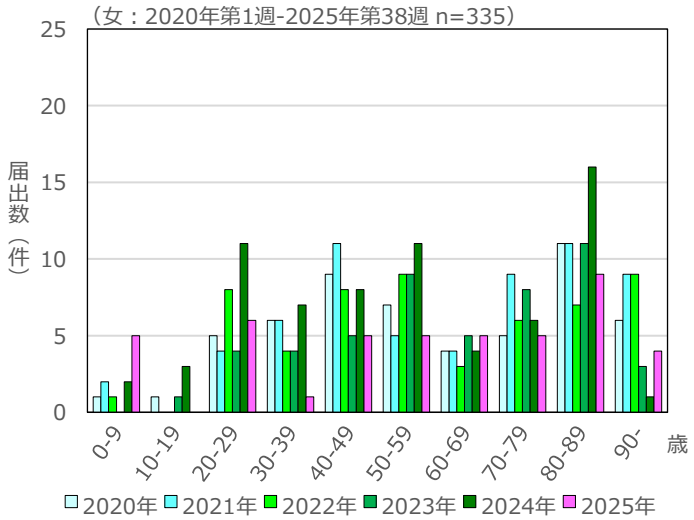


図5　年代別・年別届出数
（女：2020年第1週-2025年第38週 n=335）



厚生労働省は、新規結核患者は高齢者に多く、およそ7割が60歳以上となっていることを指摘しています。国立健康危機管理機構によると、全国における2023年の新登録結核患者数は、2022年と比較し15歳以上から39歳以下までの年齢階級で増加が見られ、また各年齢階級別で全体に占める割合は、80-89歳が全体の28.9%を占めて最も多くなりました。

結核の症状は、長引く咳、たん、微熱、体のだるさなどが挙げられますが、特徴的なものがなく、初期には目立たないため、特に高齢者では気づかないうちに進行しまうことがあります。結核を発症しても、早期に発見できれば重症化を防げるだけではなく、大切な家族や友人等への感染拡大を防ぐことができることから、早期受診・早期診断が重要となります。

※ 感染症発生動向調査とは、感染症の発生情報の正確な把握と分析、その結果の国民や医療機関への迅速な提供・公開により、感染症に対する有効かつ的確な予防・診断・治療に係る対策を図り、多様な感染症の発生及びまん延を防止することを目的としています。

＜参考＞千葉県感染症情報センター
https://www.pref.chiba.lg.jp/eiken/c-idsc/index.html